

障害幼児をもつ母親の不安と 「子どもとの関係」認識との関連について —「子ども行動」および「親としての自分」の変化認識に着目して—

澤 江 幸 則*

Abstract

This is the study about anxiety and cognition through interaction with disabled children. The cognition of change, not only to the child's behavior, but to oneself as a parent of a disabled child. This study was conducted on 42 mothers who had disabled children and utilized the day service for treatment and education.

Consequent to this study, three conclusions were arrived at. Firstly, the changes that the mother of a disabled child underwent were displayed with the progression of time. She had anxieties about the present circumstances, the future, her child and herself vis-à-vis society. Secondly, the change of anxieties which these mothers had were not related to the use of the day service for treatment and education. Thirdly, it was suggested that the anxieties not only affected the change of cognition toward child behavior but also to oneself as parents.

Based on the above conclusions, the future support for parents in the day service for treatment and education was discussed.

Key Words : Mother with Disabled Children, Anxiety, Child Behavior, Oneself as Parent

The Relevance of Anxiety and Cognition through the Interaction with Mother of Disabled Children

* Yukinori Sawae

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted November 10, 2003. Published December 20, 2003.

1. 問題と目的

子どもを育てることは母親にとってある種日常的な出来事である。そして多くの母親は、子どもの身体的、精神的、社会的側面の発達を期待しながら、そのために必要と考えられる子どもへの関わりを日常的に展開しているのである。しかしなかには、その諸側面において同年齢の子どもと同様の発達が、全般的にもしくは部分的に期待されにくい子どもがいる。いわゆる発達上の障害をもつ子ども（以下、障害幼児）である。

障害幼児をもつ母親の多くは、出産後まもなく病院においてか、保健所等で行われる乳幼児健診などで、子どもの障害が発見され、その障害が告知される。そして子どもが3歳ころに至るまでには、何らかの療育的関わりをもつようになると言われている⁽¹⁸⁾。例えば、母子通園施設、障害児通園施設、障害児入所施設といった療育機関は、主に障害幼児への直接的支援を行っている⁽⁷⁾。その療育形態には、心理士などによる個別指導やセラピストによる集団指導などがある。また頻度は不定期のものや、週1日から週5日までの定期的なものがある⁽³⁷⁾。

障害幼児をもつ母親の多くは、それらの療育機関を利用していく過程のなか、とりわけ初期段階で、子どもの障害を受けとめきれず、日常的に戸惑いや不安を感じているようである。その一方で、子どもの障害の改善に向け、子どもの障害に対する知識や関わり方を積極的に学んでいく母親が多くいるのも事実である。つまり障害幼児をもつ母親は、子どもの障害に対するショックや否認そして子育てにおける不安など、否定的感情を持ちつつ、子育てのなかで、子どもの発達を期待し、親としてできる努力を惜しまないでいることがほとんどである⁽¹³⁾。

その障害幼児をもつ母親の子育てにおける不安は、例えば、子どもの行動や姿の理解のしにくさ、子どもへの関わり方に関するものであると言われている⁽⁵⁾⁽¹⁰⁾⁽³⁶⁾。また同年齢児に比べて目立つ子どもの活動のできにくい面を気に病み、子どもの障害に周りからの理解が得られないことに不安を感じている母親がいると言われている⁽²⁾。そして日常的にみられる子どもの行動や姿が、子どもの将来の不安を惹き起こすことがあると言われている⁽²¹⁾⁽³¹⁾。

そのため、母親の心的状態を理解し、そのような不安を軽減していこうとする取り組みは、子どもの発達環境にとって重要な養育者である母親の養育を安定させるきっかけとなるだろう。実際、療育機関の多くは、障害幼児をもつ母親を、子どもの発達にとって重要な存在であると⁽³³⁾し、障害をもつ子どもの発達の援助者（co therapist）であるという側面から援助している。加えて、これまでの研究から、療育機関等の専門機関において、子どもの障害理解や障害受容など、子どもの障害の認識を介した親としての適応のための支援が重要であると⁽¹⁴⁾⁽¹⁷⁾⁽²⁵⁾⁽³²⁾指摘されている。例えば松尾・加藤によれば、早期からの専門機関の利用は、母親の子どもに対する障害認識の機会を増大させ、その結果、母親の養育負担感が抑止されることを示唆している⁽¹⁷⁾。

このように子どもの障害を認識していくということは、障害幼児をもつ母親の子どもとの関わりにおいて、不安を軽減させるものと考えられる。しかし日常的な子どもとの関わりは、子どもの障害有無に関係なく、母親にとって不安を助長するストレスフルな状況である。例えば、健常児をもつ母親を対象とした大野らの研究によれば、日常的な子どもとの関わりが、母親の焦りや負担、自分の行動の制約につながることを示唆している。従って障害幼児をもつ母親の不安を捉えようとする際には、その子どもの障害の認識だけでなく、日常的な子どもとの関わりを通じた認識（「子どもとの関係」認識）を捉えておく必要があると考えられる。⁽²⁸⁾つまり Stevenson-Hinde, & Simpsonが、42ヶ月時の子どもの気質特性が8ヶ月後の母親の精神的不安定さに関連していることを報告しているように、⁽³⁰⁾母親の不安に影響を与えられ「子ども行動」の認識を捉えておく必要がある。しかし日常的な子どもとの関わりは、子どもへの一方向的なものだけではない。すなわち子どもに対する母親の働きかけ、もしくは子どもの働きかけに対する母親の反応は、子どもの行動に何らかの影響を与える。従って「子ども行動」の認識はもちろんのこと、「親としての自分」の認識が、母親の不安に影響している可能性が考えられるのである。しかしながら「子どもとの関係」認識と、母親の不安との関連を明らかにしようとした研究は概して多くない。とりわけ療育実践における分野においては、ほとんどみられない。

そこでここでは、障害幼児をもつ母親の子育てにおける不安（以下「不安」）を取り上げ、「子どもとの関係」認識との関連を明らかにしようと考えた。また特に療育機関においては、子どもの発達や行動変容はもちろんのこと、親の心的変化に向けたアプローチが行われていることから、母親自身が「子ども行動」および「親としての自分」の変化をどのように認識しているか（変化認識）に着目しておく必要があると考えた。そしてその結果をもとに今後の療育機関における障害幼児をもつ母親に対する支援のあり方についての資料を得たいと考えた。

II. 方 法

1. 対象者

関東・東北地方の2つの政令都市に在住する障害幼児をもつ母親42人を対象とした。対象者の属性は表1の通りである。

2. 期間と手続き

調査期間は1998年5月10日から7月30日であった。そして、障害幼児をもつ親の会を通して、質問紙調査を50人の会員全員に送付し、42人から回収した（回収率84.0％）。

3. 調査項目

調査項目は大きく4領域に分かれる。具体的な項目内容については資料に付す。

- 1) 「不安」領域：現在の日常的な子どもとの関わりの中かで不安であると認識していると考え

表1 対象者の属性 () 内は総数42の割合

1) 母親の属性について		人数	割合
年齢層	26歳以上31歳未満	3	(7.1%)
	31歳以上36歳未満	20	(47.6%)
	36歳以上41歳未満	14	(33.3%)
	41歳以上46歳未満	5	(11.9%)
2) 子どもの属性について			
年齢層	3歳児未満	2	(4.8%)
	4歳児	11	(26.2%)
	5歳児	10	(23.8%)
	6歳児	10	(23.8%)
	7歳児以上	9	(21.4%)
障害名	PDD (広汎性発達障害)	32	(76.2%)
	MR (精神発達遅滞)	8	(19.0%)
	その他	2	(4.8%)

えられる項目を5つ用意し、そのなかから当てはまると思われるものを全て選択するように求めた。その項目内容は、⁽⁴⁾⁽⁶⁾⁽¹²⁾⁽¹⁶⁾⁽²⁰⁾⁽²³⁾⁽²⁴⁾⁽²⁶⁾⁽³⁵⁾ 親の不安に関する先行研究を参考に、〈子どもの将来「質問紙上の項目表現（以下、同様）：子どもの将来について」や〈子育ての仕方「子育てのしかた」〉、〈家族の協力「家族の協力」〉、〈周囲の目「周囲の目」〉、〈時間的制約「自分自身の時間」〉に関するものを取り上げた。またそれ以外に考えられる「不安」については、「その他」の項目を設け、そこに自由に記述するように求めた。また療育開始以前の母親の「不安」について知るため、療育機関を利用した時期とそれに至るまでの状況（療育を受け始めたきっかけ）について尋ねた後、同様の項目のなかから、回想的に選択するように求めた。

2) 「子どもとの関係」認識領域：これまでの療育機関利用に伴う「子ども行動」と「親としての自分」に対して変化したと認識すると考えられる項目をそれぞれ6つ用意し、そのなかから特に強く感じたものを3つ選ぶように求めた。「子ども行動」の項目内容は、実際の療育における親との関わり（例えば、親面接や親の会の会合）のなかで親が表現していたものを参考に、子どもの〈言語発達「ことばの面でよい変化」や〈コミュニケーション発達「やりとりしやすくなった」〉、〈身体発達「身体の発育がよくなった」〉、〈問題行動の軽減「問題行動が減った」〉、〈日常生活行動の獲得「できることが増えた」〉、〈笑顔の増加「笑顔が多くなった」〉に関するものを含めた。またそれ以外に考えられる「子ども行動」の変化については、「その他」の項目を設け、そこに自由に記述するように求めた。そして「親としての自分」の項目内容は、実際の療育における親との関わりのなかで親が表現していたものを参考に、親の〈子どもへの関わり方「子どもへのかかわり方」や〈家族への関わり方「家族への接し方」〉、〈他児への関わり方「他の子どもへの接し方」〉、〈子ども像「子どもに対する見方」〉、〈子育て観「子育てに対する考え方」〉、〈人生観「人生の価値観」〉に関するものを含めた。またそれ以外に考

えられる「親としての自分」の変化については、「その他」の項目を設け、そこに自由に記述するように求めた。

3) 利用した療育に関する領域：まず、これまでに療育（子どもの障害の軽減や発達の促進を目的とした訓練や教育・心理学的援助を行っている場）の利用があったかを尋ねた。そしてその利用している療育に関する内容について尋ねた（現在、療育機関を利用していないと回答した場合は、この領域の質問は無記入とした）。その質問内容は〈療育形態〉、〈療育内容〉、〈療育機関利用のきっかけ〉、〈利用年数〉、〈利用頻度〉である。〈療育形態〉は、1. 個別指導中心、2. 集団指導中心、3. 個別指導と集団指導半々のなかから、〈療育内容〉は、1. 設定課題中心、2. 自由保育中心、3. 個別設定課題と自由保育半々のなかから、それぞれ該当する選択肢を選択するように求めた。〈療育機関利用のきっかけ〉は、1. 児童相談所、2. 医者、3. 保健所、4. 友人、5. 親、6. 幼稚園のなかから該当する選択肢を選択するように求めた。〈利用年数〉は、該当する数字を記入することを求めた〈利用開始時の子どもの年齢〉と、〈調査時の子どもの年齢〉から、年単位で算出することとした。そして〈利用頻度〉は、1. 五日／週以上、2. 三日／週以上、3. 一日／週以上、4. 一日／月程度、5. その他 のなかから、該当する選択肢を選択するように求めた。

4) 対象者の属性領域：対象者の属性として、〈子どもの月齢〉、〈障害名〉、〈母親の年齢層〉に関する項目について尋ねた。〈子どもの月齢〉は該当する数字を記入することを求め、〈障害名〉は、診断された障害名を記入することを求め（暫定診断名も含む）、〈母親の年齢層〉は、1. 21歳未満、2. 21歳以上26歳未満、3. 26歳以上31歳未満、4. 31歳以上36歳未満、5. 36歳以上41歳未満、6. 41歳以上46歳未満、7. 46歳以上のなかから、該当するものを選択するように求めた。

Ⅲ. 結 果

1. 利用している療育機関について

まず障害幼児をもつ母親が利用している療育機関について報告する。分析対象となった42人全員が、療育機関の利用があると回答した。そして〈療育機関利用のきっかけ〉は、保健所（57.1%）がもっとも多く、ついで児童相談所（16.7%）、その他（14.3%；例えば、自分からの申告、幼稚園からの紹介）、医者（7.1%）、友人（2.4%）であった（不明2.4%）。そして〈療育形態〉は、「集団指導」（51.4%）がもっとも多かった。ついで「個別指導」（24.3%）および「個別指導・集団指導半々」（24.3%）であった。また〈療育内容〉は、「設定課題中心」（73.3%）がもっとも多かった。ついで「設定課題・自由保育半々」（20.0%）、「自由保育中心」（6.7%）であった。療育機関の〈利用年数〉は、全体の平均で1.7（レンジ0年～5年）年であった。但しここでいう0年は1年を満たしていないことを意味しており、療育利用経験がな

表 2 障害幼児をもつ母親の「不安」項目

（ ）内は総数42の割合

不安項目	不安あり	
	療育開始前	現 在
子育ての仕方	32 (76.2%)	12 (28.6%)
子どもの将来	31 (73.8%)	29 (69.0%)
周囲の目	13 (31.0%)	13 (31.0%)
時間的制約	4 (9.5%)	7 (16.7%)
家族の協力	3 (7.1%)	2 (4.8%)
その他	4 (9.5%)	5 (11.9%)

いということではない。療育機関の〈利用頻度〉については、「週5日以上」（44.7%）がもっとも多かった。ついで「週1日以上」と「月1日程度」（18.4%）、「週3日以上」（15.8%）の順であった（不明2.7%）。

2. 障害幼児をもつ母親の「不安」について

障害幼児をもつ母親の「不安」について集計した結果は、表2の通りである。それによると、療育開始前において障害幼児をもつ母親が多く選択した「不安」項目は、〈子育ての仕方〉（76.2%）と〈子どもの将来〉（73.8%）であり、次いで〈周囲の目〉（31.0%）、〈時間的制約〉（9.5%）、〈家族の協力〉（7.1%）の順であった。「その他」の項目を選択したものは4名であり、その内容は「療育利用待機」や「漠然とした不安」などに関するものであった。

また調査時に療育機関を利用していた時点（以降、現在）の障害幼児をもつ母親がもっとも多く選択した「不安」項目は、〈子どもの将来〉（69.0%）であった。次いで〈周囲の目〉（31.0%）、〈子育ての仕方〉（28.6%）、〈時間的制約〉（16.7%）、〈家族の協力〉（4.8%）の順であった。「その他」の項目を選択したものは5名であり、その内容は「きょうだい児への物理的・精神的負担」や「無力感」、「子どもに対する期待の喪失感」などに関するものであった。

次に、療育開始前と現在の「不安」を比べると、〈家族の協力〉や〈周囲の目〉を選択した割合はほとんど変化がなく、〈子育ての仕方〉については減少する傾向にあった。そして〈子どもの将来〉を選択した割合は、療育開始前と現在ともに高く、〈時間的制約〉については、選択した割合が増加する傾向にあった。

3. 障害幼児をもつ母親の「子どもとの関係」認識について

療育機関利用に伴う親の「子どもとの関係」認識について集計した結果は表3の通りである。そのうち障害幼児をもつ母親がもっとも多く選択した「子ども行動」項目は、〈日常生活行動の獲得〉（69.0%）であった。次いで〈コミュニケーション発達〉（57.1%）、〈言語発達〉（38.1%）、〈笑顔の増加〉（31.0%）、〈問題行動の軽減〉（21.4%）、〈身体発達〉（7.1%）の順

表 3 療育機関利用を伴う障害幼児をもつ母親が変化と認識した「子どもとの関係認識」項目

	人数	(割合)
〈子ども行動〉項目		
日常生活行動の獲得	29	(69.0%)
コミュニケーション発達	24	(57.1%)
言語発達	16	(38.1%)
笑顔の増加	13	(31.0%)
問題行動の軽減	9	(21.4%)
身体発育	3	(7.1%)
〈親としての自分〉項目		
子ども像	32	(76.2%)
子どもへの関わり方	26	(61.9%)
子育て観	16	(38.1%)
人生観	13	(31.0%)
他児への関わり方	7	(16.7%)
家族への関わり方	4	(9.5%)

であった。

また障害幼児をもつ母親が多く選択した「親としての自分」項目は、〈子ども像〉(76.2%)と〈子どもへの関わり方〉(61.9%)であり、次いで〈子育て観〉(38.1%)、〈人生観〉(31.0%)、〈他児への関わり方〉(16.7%)、〈家族への関わり方〉(9.5%)の順であった。

4. 障害幼児をもつ母親の「不安」と「子どもとの関係」認識との関連について

療育機関を利用してからの「不安」、つまり現在の「不安」と、その間に変化したと認識された「子ども行動」と「親としての自分」の変化認識との関連について検討するため、現在の「不安」項目を目的変数、「子どもとの関係」認識の項目を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。そして目的変数としての「不安」項目はダミー変数とし数量化し（項目をチェックした場合を「1」とし、そうでない場合を「0」とした）、説明変数としての「子どもとの関係」認識項目は選択／非選択のカテゴリー変数（項目を選択した場合は「1」とし、非選択の場合は「2」）として取り扱った。そして各「不安」項目変数に対して、「子どもとの関係」認識項目変数を投入し、ロジスティック回帰係数（B）を求めた。その結果を表4に示す。

それによると、「不安」項目の〈子どもの将来〉（定数項=3.893, $p<.01$ ）は、「親としての自分」項目の〈子ども像〉（ $B=-5.382$, $p<.01$ ）と有意に関連していた。また有意ではないが、「子ども行動」項目の〈笑顔の増加〉（ $B=-4.727$, $p<.10$ ）と関連する傾向にあると考えられた。そして「不安」項目の〈子育ての仕方〉は、有意ではないが、「親としての自分」項目の〈子育て観〉（ $B=2.662$, $p<.10$ ）と関連する傾向にあると考えられた。また「不安」項目の〈周囲の目〉は、「親としての自分」項目の〈子どもへの関わり方〉（ $B=-5.075$,

表 4 療育機関利用を伴う障害幼児をもつ母親の「不安」と「子どもとの関係」認識の関連
ロジスティック回帰分析結果に依拠：数値は非標準化偏回帰係数（B）

説明変数：	目的変数：「不安」項目				
「子どもとの関係認識」項目	子どもの将来	子育ての仕方	家族の協力	周囲の目	時間的制約
〈子ども行動〉項目					
日常生活行動の獲得					
言語発達				3.898	+
コミュニケーション発達					
問題行動の軽減				3.271	+
笑顔の増加	-4.727	+			
身体発育					
〈親としての自分〉項目					
子どもへの関わり方				-5.075	*
子ども像	-5.382	**			
家族への関わり方					
子育て観		2.662	+		
他児への関わり方				-7.664	*
人生観					

+ : $P < .10$ * : $P < .05$ ** : $P < .01$

$p < .05$ ）と〈他児への関わり方〉（ $B = -7.664$, $p < .05$ ）と有意に関連していた。またそれは、有意ではないが、「子ども行動」項目の〈言語発達〉（ $B = 3.898$, $p < .10$ ）と〈問題行動の軽減〉（ $B = 3.271$, $p < .10$ ）と関連する傾向にあると考えられた。

5. 療育機関利用状況との関連について

療育機関の利用状況が、母親の「不安」や「子どもとの関係」認識と関連があるのかについて、クロス分析（カイ二乗分析もしくはFisherの直接確率法を適用した）を行った。その際、〈利用年数〉においては、1年以下群（ $N = 17$ ）と1年から3年未満群（ $N = 16$ ）、3年以上群（ $N = 9$ ）に分けて、分析した。

その結果、〈利用年数〉、〈利用頻度〉、〈指導形態〉、〈指導内容〉はそれぞれ、母親の「不安」項目および「子どもとの関係」認識項目との間に、統計上の有意な関連を認めなかった。

また対象者の属性（〈母親の年齢層〉、〈子どもの年齢層〉、〈子どもの障害種別〉）との関連についても併せて、クロス分析を行った。その際、〈子どもの障害種別〉については、PDD（ $N = 32$ ）と非PDD（ $N = 10$ ）の2グループに分けて分析を行った。その結果、〈母親の年齢層〉と〈子どもの年齢層〉、〈子どもの障害種別〉はそれぞれ、母親の「不安」項目および「子どもとの関係」認識項目との間に、統計上の有意な関連を認めなかった。

Ⅳ．考 察

1. 障害幼児をもつ母親の「不安」について

本研究の結果より、療育機関を利用した障害幼児をもつ母親の「不安」内容は変化することが明らかになった。そのうち〈子育ての仕方〉は、療育開始前から現在に至るまでに、不安として認識されにくくなり、かわって〈子どもの将来〉と〈時間的制約〉についての不安が認識されやすくなるのではないかと考えられた。

これまでの先行研究から、療育開始前の時期にあたる障害幼児をもつ母親は、将来的な不安を持ちつつも、当面の日常的な子育てに関心が向けられることが指摘されている⁽²⁹⁾。その一方で、足立の研究結果⁽¹⁾によると、子どもの年齢がすすむにつれて母親の多くが、子どもの将来的問題をより認識するようになると示唆されている。すなわち障害幼児をもつ母親は、「不安」においては、〈子育ての仕方〉といった日常的問題を消失させていくことに伴い、〈子どもの将来〉といった将来的問題に関心を集約させていくようになると考えられる。つまり障害幼児をもつ母親の「不安」には、「現在－将来」といった「時期に関する不安」の変容があると考えられる。

また広瀬・福屋の研究⁽⁸⁾によれば、障害受容初期の段階での母親の心配は、子どもに関することが大半を占めていると示唆されている。しかし母親は、障害認識がすすむにつれて、日常的な子どもとの関わりに、ある程度の見通しがみられると、自分自身の生き方や社会活動にも関心を寄せるようになると言われている⁽⁸⁾⁽³⁴⁾。本研究で取り上げた〈時間的制約〉は、社会活動や女性としての生き方など、自己実現にむけた活動を行ううえでの制約を意味している⁽¹¹⁾。すなわち本研究でみられた〈時間的制約〉の「不安」への関心の増加は、母親が子どもだけでなく、自分自身もしくは社会に関心によせるようになったことを示す結果であると思われる。つまり障害幼児をもつ母親における「不安」には、「子ども自身－自己・社会」といった「対象に関する不安」における変容があると考えられる。

しかし障害幼児をもつ母親における「不安」の変容は、どのような要因によって起こるのであろうか。これまでに指摘されているように、療育機関を利用することで、「不安」を変容してきたのであろうことが推察される。しかし本研究における療育機関の利用状況と「不安」との関連についての結果から、単に療育機関を利用したから、または療育機関を長く利用したという理由から、母親の「不安」の変容に影響があったとは一概にはいえない。むしろ療育機関は、子どもの障害や養育などについての情報提供による母親の「子ども行動」や「親としての自分」に対する認識変容を介して、間接的に「不安」に影響を与えたと考えたときではないだろうか。そこで「不安」を「変化認識」との関連から検討してみることにした。

2. 障害幼児をもつ母親の「不安」と「子どもとの関係認識」との関連について

本研究の結果から、障害幼児をもつ母親の「不安」と「子どもとの関係認識」との関連がみられた。そのうち子どもの〈コミュニケーション発達〉と〈問題行動の軽減〉に変化を認識している母親には、〈周囲の目〉についての不安を認識している人が多いことがわかった。〈周囲の目〉に不安を感じるということは、他者（社会一般）の視点から現状を捉えようとする心的働きであると考えられる。従って、障害幼児をもつ母親は、子どもの発達の変化や行動の望ましい変化を認識することにより、子どもだけに向けられた関心を、社会にも向けるようになることができる。つまり障害幼児をもつ母親における「対象に関する不安」の変容の背景のひとつには、子どもの発達・行動上の変化を認識していく過程との関連があると考えられないだろうか。

また〈笑顔の増加〉や〈子ども像〉に変化があると認識している母親には、〈子どもの将来〉についての不安を認識している人が少ないことが示されている。ここでいう〈笑顔の増加〉は、子どものポジティブな側面であろう。しかし〈子ども像〉は、日常的な子どもの行動や姿に対する発達の理解などが含まれるため、それはポジティブな側面に限ったものではない。むしろ障害を起因とする適応上の問題行動に対するネガティブな側面が反映されている可能性が考えられる。これまで障害幼児をもつ母親は子どものネガティブな側面を強調する傾向があると⁽⁹⁾⁽²⁸⁾言われ、それが、親の心的状態にネガティブに影響することが示されてきた。⁽²¹⁾しかし本研究の結果は、発達の限界を含めた子どもの発達状態を理解することが、親の将来的不安を減少させるものと考えられる。これは障害幼児をもつ母親に限らず、子どもに関するネガティブな認識が、親のネガティブな子育て認識と単純な相関関係を持たないといった研究報告からも支持されるものである。これらのことから、障害幼児をもつ母親の「時期に関する不安」の変容の背景のひとつには、子どものポジティブ・ネガティブといった両側面を認識していくという過程があるのではないかと考えられないだろうか。

加えて、本研究の結果のうち、〈子どもへの関わり方〉や〈他児への関わり方〉に変化を認識している母親には、〈周囲の目〉についての不安を認識している人が少なかった。これは、障害をもつ子どもと関わる「親としての自分」に対する自信の表れのひとつとして理解することができないだろうか。つまり「親としての自分」に対する認識は、これまでの様々な人間関係を通して形成されるものであるため、他者の視点にたったものであると言われる。⁽¹⁵⁾そのことから、障害幼児をもつ母親の他者の視点からみた「親としての自分」の認識は、子どもに対する関わりの経験内容によって左右されると思われる。例えば、障害幼児をもつ母親、とりわけ育児初期段階では、子どものパニックへの対処が困難であることなどにより、⁽³⁾「親としての自分」に対してネガティブに認識させる可能性がある。しかし次第に子どもの行動の理解や対応に対する効力感が伴うことにより、⁽²⁸⁾「親としての自分」に対してポジティブに認識するようになると考えられるのである。その結果、「親としての自分」に対する肯定的な認識が高まることにより、安定した養育環境、つまり子どもにとっての発達環境を安定化させることが期待さ

れると思われるのである。

3. 療育機関に求められる親支援

これまでの検討から、療育機関に求められる親支援のひとつとして、親の「子ども行動」への認識を捉えておく必要があると考えられた。しかしそれは、障害認識という枠組みだけでなく、子育てのなかでみられる子どもの行動や姿として捉えること、とりわけポジティブ・ネガティブといった両側面についての認識を捉えていく必要があると考えられる。また子どもへの親としての関わりに効力感を持たせるための具体的な支援を行うと同時に、その「親としての自分」に対する認識を捉えることが必要であると考えられる。一方、療育機関のどのような方略が、母親のそれらの認識に影響を与えるのかについては、研究方法の性質上、十分に検討することができなかった。

以上の点を踏まえ、今後、「子ども行動」や「親としての自分」に関する認識を親発達との関連から捉え、それらの認識が、どのような時系列的变化を示すのか、どのような要因と関連しながら変化していくのかといった基礎的研究を重ねていくことが求められるだろう。

文 献

- (1) 足立智昭 (1998)：障害をもつ乳幼児の母親の心理的適応とその援助に関する研究。風間書房。
- (2) 愛護養護学校 (1996)：親たちは語る—愛護養護学校の子育て・親育ち—。ミネルヴァ書房。
- (3) Beckman, P.J (1983) : Influence of selected child characteristics on stress in families of handicapped infants. American Journal of Mental Deficiency, 88, 150-156.
- (4) Donovan, A.M (1988) : Family stress and ways of coping with adolescents who have handicaps : Maternal perception. American Journal on Mental Retardation, 92, 502-509.
- (5) Dyson, L.L (1991) : Families of young handicapped children : Parental stress and family functioning. American Journal on Mental Retardation, 95, 623-629.
- (6) Friedrich, W.N., & Friedrich, W.L (1981) : Psychosocial assets of parents of handicapped and nonhandicapped children. American Journal of Mental Deficiency, 85, 551-553.
- (7) 福田志津枝 (2001)：これからの児童福祉：第3版。ミネルヴァ書房。
- (8) 広瀬幸美・福屋靖子 (1998)：先天性心疾患児をもつ母親の養育上の心配—第2報：家庭生活、親の生活、受療に関して—。小児保健研究, 57, 451-459.
- (9) 稲浪正光・西信高・小椋たみ子 (1980)：障害児の母親の心的態度について。特殊教育学研究, 18, 33-39.
- (10) 神園幸郎 (1984)：障害児をもつ親の意識変容過程。琉球大学教育学部紀要, 27, 491-509.
- (11) 柏木恵子 (1998)：結婚・家族の心理学。ミネルヴァ書房。
- (12) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也 (1993)：育児環境が子どもの心身に及ぼす影響に関する研究—育児不安に関する基礎的検討—。日本総合愛育研究所紀要, 30, 27-39.
- (13) 奇恵英 (1996)：障害児・者をもつ親の心理特性について—育児における母親のアンビバレント

- な感情の受容過程一。日本特殊教育学会第34回大会発表論文集，688-689.
- (14) 北原 佑（1995）：発達障害児家族の障害受容。総合リハビリテーション，23，657-663.
- (15) 古澤頼雄（1997）：子育てによる親育ち。母子保健研究，36，14-17.
- (16) 牧野カツコ・中西雪夫（1982）：乳幼児をもつ母親の育児不安。家庭教育研究所紀要，3，34-56.
- (17) 松尾久枝・加藤孝正（1995）：障害児をもつ母親の養育負担感にかかわる要因に関する研究—社会資源の利用状況を中心に—。発達障害研究，16，281-293.
- (18) 三隅輝見子・清水康夫・本田秀夫（1993）：発達障害児の早期療育における親援助プログラムの開発（第2報）—早期療育導入時における子どもの障害をめぐる親の認識—。安田生命社会事業団研究助成論文集（障害児療育関連分野），28，106-115.
- (19) 永井洋子（1992）：自閉症の治療と家族。太田昌孝・永井洋子編 自閉症治療の到達点，日本文化科学社，225-254.
- (20) 新見明夫・植村勝彦（1980）：心身障害幼児をもつ母親のストレスについて。特殊教育学研究，18，18-33.
- (21) 新見明夫・植村勝彦（1981）：就学前の心身障害幼児をもつ母親のストレス。発達障害研究，3，206-216.
- (22) 大野祥子・柏木恵子・若松素子・岡松佐知子（1996）：親にとっての子どもの価値と育児参加。牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編 子どもの発達と父親の役割，ミネルヴァ書房，107-120.
- (23) 大藪泰・前田忠彦（1994）：乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅰ。小児保健研究，53，826-833.
- (24) Ross, C.E., & Mirowsky, J (1988) : Child care and emotional adjustment to wives' employment. Journal of Health and social Behavior, 29, 127-138.
- (25) 幸淳子・本城秀次（1993）：小児外来未熟児健診における母子への治療的介入—乳幼児精神医学の立場からの追跡研究—。乳幼児医学・心理学研究，2，15-25.
- (26) 佐々木保行・高梨一彦・本郷一夫（1991）：母親のChild Rearing Burnoutに関する研究（第2報）。鳴門教育大学研究紀要（教育科学編），6，270-283.
- (27) 澤江幸則（2000）：障害幼児をもつ父母の子育て充足感についての研究—子どもに対する関係認識と地域資源の利用の関連から—。発達障害研究，22，219-229.
- (28) 澤江幸則（2001）：障害幼児をもつ親における「子育て感」と「子どもに対する関係認識」との関連性についての研究。平成13年度東北大学博士論文.
- (29) Spresterbach, D.C (1973) : Psychosocial aspects of the “cleft palate problem”. University of Iowa Press.
- (30) Stevenson-Hinde, J., & Simpson, A. E (1982) : Temperament and relationships. In R. Potter, & G.M. Collins (Eds.), Temperamental differences in infants and young children (pp.51-65). Pitman.
- (31) 鈴木乙史（1985）：障害児の母親の障害受容にともなう克服の人格変容過程に関する研究—母親の自己像の変化を中心として—。安田生命社会事業団研究助成論文集，21，65-74.
- (32) 鈴木光子・木村宏子・辻田陽子（1996）：心身障害児をもつ母親の心理。弘前大学教育学部紀要，75，99-111.
- (33) 蔦森武夫・清水康夫（2001）：親がこどもの障害に気づくとき—障害の告知と療育への動機づけ—。総合リハビリテーション，29，143-148.
- (34) 盧幹一郎（1963）：精神薄弱児の親の子女受容に関する分析的研究。京都大学教育学部紀要 9，145-172.
- (35) Waisberg, S.E (1980) : Parent's reactions after the birth of a developmentally disabled child.

American Journal of Mental Deficiency, 84, 345-351.

- (36) Wing, L. (久保紘章・佐々木正美・清水康夫, 訳) (1998) : 自閉症スペクトル : 親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍.
- (37) 米田博・松山郁夫 (1997) : 障害児の福祉と療育. 建帛社.

資料：質問紙調査内容（抜粋）

I. 療育のきっかけについて

1. 子どもがいくつの時から療育をうけ始めましたか。
（ ） 歳（ ） ヶ月ごろ
2. 療育をうけ始めたきっかけはどのようなものですか。
（1. 児童相談所 2. 病院 3. 保健所 4. 友人 5. 親 6. 幼稚園 7. その他 ）
3. 療育をうける以前にはどのような不安がありましたか（複数選択）
1. 子どもの将来について 2. 子育てのしかた 3. 家族の協力 4. 周囲の目 5. 自分自身の時間
6. その他

II. 現在の療育の内容について

1. 現在うけている療育はどのくらいの頻度ですか。
（1. 五日/週以上 2. 三日/週以上 3. 一日/週以上 4. 一日/月程度 5. その他 ）
2. どのような内容の療育ですか。
指導形態 （1. 個別指導中心 2. 集団指導中心 3. 個別指導と集団指導半々）
指導内容 （1. 個別設定課題中心 2. 自由保育中心 3. 個別設定課題と自由保育半々）
3. 現在の療育によって子どもさんがどのように変化したと感じていますか（最高3項選択）
1. できることが増えた 2. ことばの面でよい変化 3. やりとりしやすくなった 4. 問題行動が減った 5. 笑顔が多くなった 6. 身体の発育がよくなった 7. その他
4. 療育をうけてお母さん方自身が変わったと思えるのはどんなことですか（最高3項選択）
1. 子どもへのかかわり方 2. 子どもに対する見方 3. 家族への接し方 4. 子育てに対する考え方 5. 他の子どもへの接し方 6. 人生の価値観 7. その他
5. 現在の子どものさんの成長についてどのような心配や不安がありますか（複数選択）
1. 子どもの将来について 2. 子育てのしかた 3. 家族の協力 4. 周囲の目 5. 自分自身の時間
6. その他